

**阿蘇地域における野草は、その収量性と栄養価から季節を通して国産飼料として利用できる**

阿蘇地域における主な野草（ススキ、ネザサ）は、収量性や TDN 含有率では改良草地に劣らず、他の飼料原料と組み合わせることで利用できる。

農業研究センター草地畜産研究所（担当者：野崎 由美）

研究のねらい

熊本県阿蘇地域には、約 22,000ha の草原が存在し、そのうち約 15,000ha は野草地である。野草地は長年、野焼きや輪地切りといった人為的行為と、家畜の放牧や採草といった草資源の利用によって維持されてきた。しかし近年、野焼き出役者や畜産農家の高齢化等の理由から維持管理が課題となっている。野草地は畜産的利用だけでなく、景観や環境保全等の観点からも、より一層の活用が求められていることから、改めて野草の価値を確認する必要がある。

そこで本研究では、阿蘇地域の野草地を主に構成しているススキ優占草地とネザサ優占草地について、その植生と栄養評価を行い、今後の活用方法について検討した。

研究の成果

1. 野草地における各野草の割合は、ススキ優占草地では 95% であり、ネザサ優占草地では 87%、5 月～12 月でいずれも全体の 8 割以上を占める（図 1、2）。水分率は、改良草地に比べ野草地の方が低く、予乾に要する時間が短い（図 3）。
2. 乾物収量は 7 月以降でススキが最も高い値で推移し（図 4）、TDN 含有率は、いずれの野草地も調査期間を通して 50% 前後と、日本標準飼料成分表の牧乾草 1 番草出穂期～再生草と同等、またはそれ以上の数値を示す（図 5）。
3. 各野草優占地の CP 含有率は冬場で特に低く（図 6）、冬場の野草地を利用する場合は、タンパク補助飼料等の他の飼料と組み合わせる必要がある。
4. NDF 含有率はススキが最も高いが、ネザサと改良草地間での有意差はない（図 7）。

成果の活用面・留意点

1. 調査対象としては標高約 900m の阿蘇外輪山地域に位置する野草地（ススキ優占地、ネザサ優占地）と、対照区として改良草地（オーチャードグラス、トールフェスク、ペレニアルライグラス混播）を用いた。
2. 調査期間は、野草地が 2021 年 5 月～2021 年 12 月、改良草地が 2018 年 5 月～2019 年 9 月であり、異なる気象条件下での結果である。
3. 優占種の割合は、毎月 1 回冠部被度による確認である。
4. 利用方法（採草、放牧）や利用頻度により野草地の植生は変化していくことから、利用後の収量性や栄養価の変化、家畜の嗜好性についても今後調査していく必要がある。
5. 給与する際は、日本飼養標準や BCS 等を活用し、家畜の成育ステージに応じて給与量を調整する必要がある。

【具体的データ】 No. 1121 (令和7年(2025年)6月) 分類コード 09-11 熊本県農林水産部

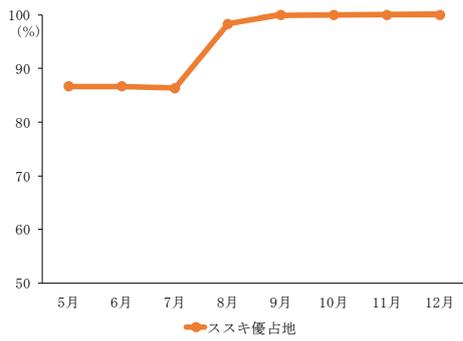


図1 冠部被度でみたススキ優占割合 (n=3)

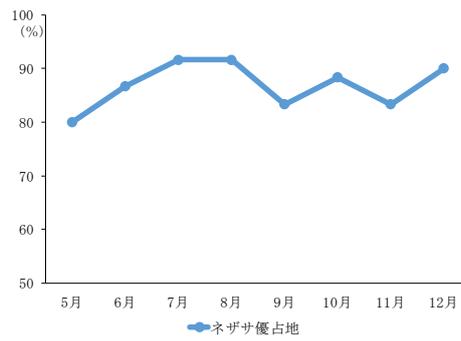


図2 冠部被度でみたネザサ優占割合 (n=3)

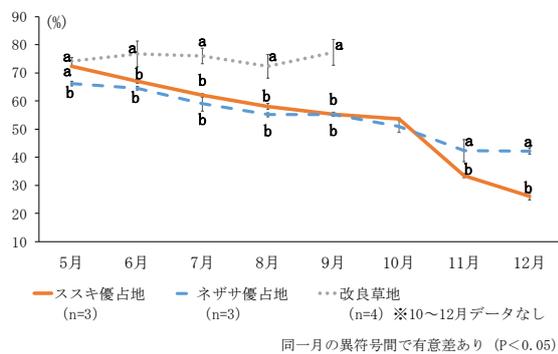


図3 水分含有率の推移

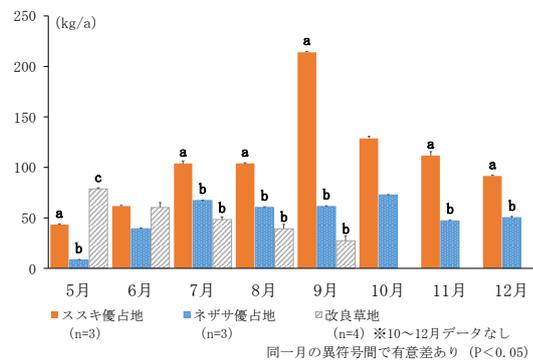


図4 乾物収量の推移

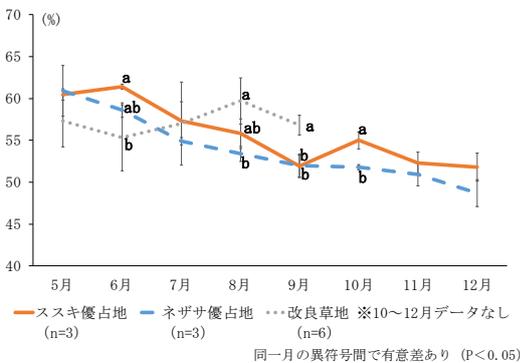


図5 TDN含有率の推移

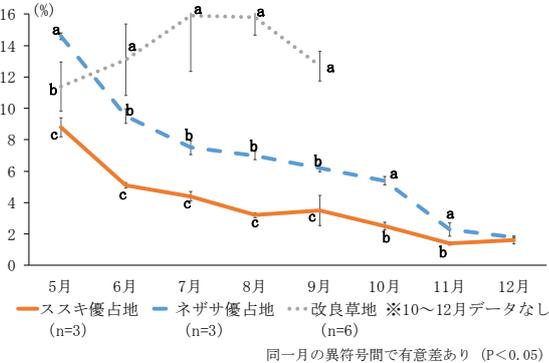


図6 CP含有率の推移

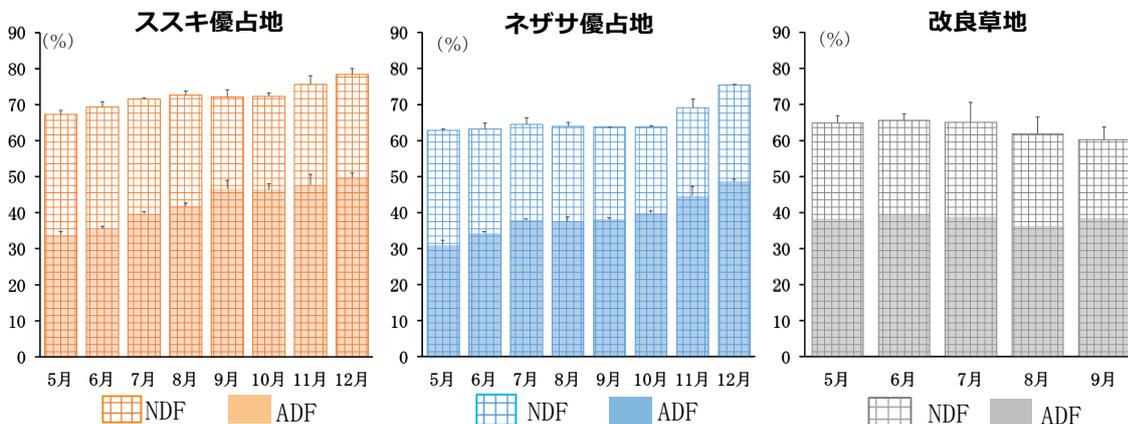


図7 NDF (うち ADF) 含有率の推移

※改良草地の10~12月データなし